

## 平頼綱

平頼綱は、鎌倉時代後期の14世紀後半、幕府内で強大な実権を握った者である。本来、その立場は、執権を継承する北条氏の本家である得宗家の被官に過ぎなかった。いわゆる御内人であり、その筆頭であった。内管領と呼ばれる職にあった。北条泰時の頃から次第に実力をつけた御内人は、経時・時頼を経て時宗の代になると、御家人に対抗し得る勢力となった。御家人は將軍の直接の家来であり、北条氏を除けば、その頃は安達泰盛が代表格であった。この時代の内管領が平頼綱である。

弘安7年(1284)に時宗が亡くなった後、執権は子の貞時が継いだ。翌弘安8年、安達泰盛は平頼綱との争いに敗れて滅び去った。ここで平頼綱が少年の貞時を擁して独裁的な勢力を振るう。しかし、9年後の正応6年(1293)、貞時のために滅ぼされた。頼綱はあまりに独断的に政治を左右したため、当時の貴族の日記に、

一向執政し、諸人恐懼のほか他事なく候(『実躬卿記』)

とあるように、諸人に恐れられたという。その結果、現代でも、頼綱の政治は恐怖政治であったとする評が多い。

しかしながら、当時の既成の支配者層の頼綱評を鵜呑みにして、頼綱の政治や人格を判断するのは考えものであろう。

一方、平頼綱は日蓮との交渉が多く知られている。というより、鎌倉で『法華経』の教えを説く日蓮を逮捕し、佐渡国に流した直接の責任者が頼綱である。また、3年後に許されて鎌倉に帰った日蓮に、蒙古襲来の時期の予測を幕府の公的な代表者として尋ねたのも頼綱であった。頼綱は侍所の所司という職にあり、政治的な問題として日蓮を扱ったのであるが、信仰の問題が色濃く関わるのは明らかである。

さらに頼綱は、横曽根門徒に経済的援助をして、親鸞の主著である『教行信証(顕浄土真実教行証文類)』を出版させている。横曽根は下総国飯沼地方にあり、頼綱に直接結びついていた。というのは、兄宗綱をしのいで権力を振るった頼綱の次

男助宗は飯沼を称し、飯沼地力の領主であったと考えられるからである。

平頼綱は、北条時宗が没した時に出家し、法名を杲円と称している。

平頼綱の先祖は、平重盛の子資盛であるという説が古来から伝えられている。『系図纂要』の「平朝臣姓関一流」によれば、

平資盛 盛国 国房 盛綱 頼綱

と次第しており、『尊卑分脈』『桓武平氏』、『系図綜覧』『清盛流系図』等も多少の異同はあるものの、資盛あるいは盛国の子孫としている。他の諸書によっても伝えられる平頼綱先祖資盛説は、ほぼこのような内容である。

しかし、鎌倉時代の歴史を記した『保暦間記』には、

貞時が内管領平左衛門頼綱不知先祖人、法名杲円

とある。また『太平記』巻10「長崎高重最後合戦事」で、頼綱の従兄弟の曾孫にあたる長崎高重が鎌倉幕府滅亡に際する新田軍との戦いで、

桓武第5の皇子葛原親王に3代の孫平將軍貞盛より13代、前相模守高時の管領に、長崎入道円喜が嫡孫次郎高重、

と名のつたという。つまり、『保暦間記』『太平記』ともに平頼綱は平資盛の子孫であるとは記していない。『尊卑分脈』では資盛の子孫説を採用していた。そのあたりを、細川重男氏は次のように推測している。すなわち、

『尊卑分脈』を編纂した洞院家の耳に入っていた資盛の子孫説を、『保暦間記』の作者が知らなかったとは考え難い。これは、資盛の子孫説は、かなり古くからありながら、誰もが信じる程有力な説ではなかったからである。『太平記』の作者も無視している。平資盛の子盛国なる人物は、『吾妻鏡』には一度も登場しない。盛国の鎌倉下向が事実なら、平宗盛父子や平維盛の子6代の鎌倉下向に匹敵する大事件であり、『吾妻鏡』が載せないはずはない。まして三位中将資盛の子の盛国が、無位無官の北条時政の被官になることなどあり得ない(1)。

細川氏は右のように平頼綱が平資盛の子孫であることを否定した。誠に卓見である

と思われる。そして頼綱の出自を伊豆時代以来の北条氏の郎従に求めている。『吾妻鏡』承元2年(1209)11月14日条に、

相州年来郎従(皆伊豆国住民也、号之主達)之中、以有功之者、可准侍之旨、可被仰下之由、被望中之、

とある中の、「主達」と称されている北条氏に根本被官の有力メンバーが平頼綱の祖だったのではないかとしているのである。では、平資盛後胤説は誰が言い出したのか。これが平頼綱ではないかという。

北条時頼治政以後の得宗専制政権にあって、ともに得宗と幕府を支える支柱でありながら、御内人と御家人とは鋭く対立した。この中で最有力御家人安達泰盛と対抗関係にあった平頼綱は自家の出自を貴種に結びつける必要があった。弘安8年(1285)の霜月騒動で泰盛以下を打倒し、

御内人でありながら幕府の頂点に立った頼綱にとっては、自家の出自の権威付けは単なる名誉欲などではなく、幕府支配の一環として切実な問題であったと言えるのである。

と、細川氏は結ぶ(2)。

細川氏の説に魅力を感じるのは、論理的な立論とともに、頼綱は横暴だとか彼の政治は恐怖政治だとかする従来の一般の頼綱観を脱していることである。旧支配者の立場からする感覚的な頼綱悪人観は、そろそろ考え直すべきであろう。

〔注〕

(1) 細川重男「内管領長崎氏の基礎的研究」(『日本歴史』479、1978年)

(2) 〔注〕(1)